ベルリン・シンポジウム
「アンネマリー・フォン・ガバインとトルファン研究」

小田壽典

一九九四年十二月九日―十二日

シンポジウム開催の呼びかけは、ズンダーマン（Prof. Dr. W. Sundermann）とツィーメ（Dr. P. Zieme）の連名による書簡であった。「つい最近私たちすべては、深い悲しみをもって、アンネマリー・フォン・ガバインに別れを告げました。彼女も望んだように私たちは、古代中央アジアのオアシス、クチャからトルファン、あるいはコータンからカラシャールに及ぶ、言語とテキスト、資料や美術品、文化と生活をめぐる討議を中断させたくありません。そこで、“Annemarie von Gabain und die Turfanforschung”のテーマのもとにベルリンで開催するシンポジウムに貴殿が参加されますように、ご案内申し上げる次第です。大會は一九九四年中に行いたいと存じます」と。そのときツィーメ宛の私信で適切な題目が見つかれば、是非出席したい旨を返事した。これよりさき、ウラロ・アルタイカ協會（ハンブルグ）から、ハンブルグ大學トルコ學と中國佛教學の教授を退官された哲學博士、ガバイン女史が一九九三年一月十五日にベルリンで九十二歳をもって逝去された訃報を得ていた。

ベルリン・シンポジウムを主催したベルリン・ブランデンブルグ科學アカデミー（BBAW）の學術企畫「トルファン研究」、いわゆるトルファン研究所（Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften, Akademievorhaben Turfanforschung. Unter den Linden 8, D-10117 Berlin）は、かつてのプロイセン科學アカデミーであり、トルファン探檢隊収集品のうち文獻資料が所屬の圖書館に収蔵されている。トルファン研究の第一世代は、探檢を指揮したグリュンヴェーデル、ルコック及び古代言語學のミュラーとトルコ學のバングであった。ガバイン女史は第二世代にあたる。いまは第三世代というべきか、今回のシンポジウムは、そのトルコ學のツィーメ博士、先輩格のズンダーマン教授（イラン學）をはじめとする研究所スタッフによって運営された。なお、ベルリン収集品の研究成果は、一九七〇年代より「ベルリン・トルファンテキスト」（Berliner Turfantexte）シリーズとして刊行され、今日第十七輯に及び、續刊が豫定されている。定期刊行物は一九七四年に『古代オリエント研究』（*Altorientalische Forschungen*）の名稱で、舊東ドイツの古代歴史考古學中央研究所の出版物として始まり、二十巻まで續き、二十一巻（一九九四）からは編集局がベルリン自由大學

に移り、當研究所の専刊ではなくなった。ガバイン女史の業績について、ハンブルグ大學における後繼者、フェーンカー（W. Veenker）と女史直系のウイグル語辭書編纂に取り組むレールボルン（K. Röhrborn, Göttingen）による「アンネマリー・フォン・ガバイン（一九〇一―一九九三）」、*UAJb.* N.F. 12（1993）及び上述ツィーメによる「アンネマリー・フォン・ガバインの思い出」、*ZDMG* 144-2(1994) に詳しい。女史は一九六二―六三年と一九七五年に来日され、わが國のトルコ言語學の展開に及ぼした影響は少なくない。

シンポジウムは十二月九日（金）からBBAWの本館（Jägerstr. 22-23）において始まった。日本からは庄垣内正弘、梅村坦のほか、丁度調査で居合わせた京都の西脇常記がオブザーバー参加した。シムズ・ウィリアムス、エンメリック、レールボルン、セルトカヤ、エルダル、ラウト、テズジャン、マウエなど、一九八一年の八十歳誕生記念ハンブルグ會議で舊知の間がらも多かった。夕刻からのトルファン研究所内の立食パーティーは、フェーンカーの長口舌があり、途中でクリーズ（H. v. Kries, Berlin）とドゥビンスキー（A. Dubinski, Warschau）によるガバインの思い出話が語られた。

初日の講演は、ツィーメがガバインのトルファン研究の業績、ハザイ（G. Hazai, Nikosia）はトルコ學への貢獻を語り、トンゲルー（A. v. Tongerloo, Leuven）が、ガバインの師、バング（Willi Bang Kaup）のルーヴェン時代（一八八八―一九一四）を述べた。以下講演順位によらず、テーマにまとめて四日間の概略を列記したい。概して出土文書の讀解（新テキスト提出または再研究、言語・文字分析、註解など）について最新の報告が行われたが、個別的研究は一層徹底してきた感がある。

まずブラーフミー文字テキストに關して、マウエ（D. Maue, Giessen）は「ウイグル語とイラン語のブラーフミー寫本」諸斷片の文字の讀み方について解説した。シムズ-ウイリアムス（N. Sims-Williams, London）はマウエと發見した「ブラーフミー文字のソグド語テキスト」の報告で、このソグド語表記は、より遲い時期だと明言した。ハルトマン（J.-U. Hartmann, Göttingen）は二語併用ブラーフミー・テキスト（TT. VIII, A. v. Gabain 1954）のその後の研究成果であった。トカラ語では、シュミット（K. T. Schmidt, Saarbrücken）が「マイトリシミトについてウイグル・トルファン寫本とハミ寫本に平行するトカラ語寫本の比較」言語分析を行い、コータン語はエンメリック（R. Emmerick, Hamburg）の「寺院會計簿」とマッギ（M. Maggi, Rom）の「*Sudānāvadāna* 刊行への序論」と題する再研究があり、またヴィレ（K. Wille, Göttingen）によって「トルファン収集品のヘルンレ諸斷片」の三十五点の研究動向が述べられた。

トルコ・ウイグル語關係では、テズジャン（S. Tezcan, Bamberg）の「古トルコ語占書の新しい解釋」、ラウト（J. P. Laut, Marburg）の「ウイグル文十業道譬喩鬘のハミ寫本」、梅村の「ビシュバリク

佛教廃寺に殘るウイグル碑文」、筆者の「註釋付きウイグル文觀音經斷片」の他、トゥグーシェヴァ（L. Ju. Tuguševa, St. Petersburg）女史によるペテルブルグ所藏の新しい寫本斷片の發表があった。内容に *türki, ötüken, buγuq / boquq* などの用語がみえて興味深く、西突厥オンオクに關する文書であるという結論に質疑がでた。休憩中にトゥグーシェヴァの席に數人が集まり、文書寫真を前にして論議が續いた。*türki* の讀みに疑問がだされ、ツィーメは *tüžit*（Skt. tuṣita, 兜率天）と讀めるといい、トゥグーシェヴァは承知せず、タラト・テキンであったか、こういう議論ができるから、シンポジウムの意味があると、女史を落ち着かせたりした。オルメズ（M. Ölmez, Ankara）は、玄奘傳のトルコ語譯と原典との差異に着目して、「ウイグル人のサンスクリットと漢語の知識について」、結果的にトゥグーシェヴァ・テキスト（一九九一）のいくつかの誤讀を正すものとなった。ハミルトン（J. Hamilton, Paris）の「古トルコ語敦煌寫本の年代について」は、先年公表した『九、十世紀の敦煌寫本』のなかに十一世紀以後元朝時代に現れる語彙があるという批評に對して反論する。レールボルンの「ウイグル語のなかの漢語二字熟語」は、漢字原語を當てる試みであり、クラーク（L.V. Clark, Bloomington）は「初期トルコ系言語とサリグ・ウイグルのすう數のかぞえ方」の類似性を指摘するものであった。タラト・テキン（T. Tekin, Ankara）の「古トルコ語の與格位格接尾辭 {+A}」は常套句にみえる上記接尾辭を分析し、エルダル（M. Erdal, Frankfurt）は「古代トルコ語の母音組織について」述べた。庄垣内發表の「ウイグル文阿毘達磨俱舍論實義疏の内容構成について」は、『西南アジア研究』三四（一九九一）の論文からさらに包括的枠組を示し、またシャルリップ（W. Scharlipp, Nikosia）の「ウイグル・ラマ教テキストについて」、セルトカヤ（O. F. Sertkaya, Istanbul）の「第二次大戰で消失・破損したウイグル文書の歴史と星の名のみえるウイグル斷片」（ミュラーが音譯とドイツ語譯を殘したテキスト、T II Toyoq x 2）があった。

マニ教に關してエーベルト（J. Ebert, Würzburg）の「マニ教美術の本質的特徴」は壁畫・挿し繪のスライドによって圖像的特色を述べ、グラーチ（Zs. Gulácsi, Bloomington）は「ウイグル・マニ教細密畫」の地域性について、カーペットやラグの圖柄にマニ教時代の傳統が限定的ローカル文化として殘ることを示した。ベドゥーン（J. D. BeDuhn, Bloomington）の「マニ教徒の聖食」は一般信者（聽者）の布施により、それを僧侶が食べることは、その中に存在する光の要素を淨化（濾過）して光の國に送るという意味がある。食後に唱われた贊歌、「十二大王」は、施食が十二の徳目に變えられると信じられていたとする。

その他、ニョリ（Gh. Gnoli, Rom）は「ソグド語説話のなかのヘルメス神としてのFarn（< Soghd. *prn / frn*）」、ペテルブルグのメシュチェルスカヤ（E. Meščerskaja）は「クロトコフ収集品のシリア語諸斷片」、及びヴォロブョヴァ（M. Vorob'eva-Desjatovskaja）

はマローフ・コレクションについて現状を述べた。そしてシチェルバク（A. M. Ščerbak）が寫本の保存状態がほんとによくないことを訴えた。トゥリヤルスキー（E. Tryjarski, Warschau）は原ブルガル語碑文の新解釋について、クリヤシュトルヌイ（S. G. Kljaštornyj, St. Petersburg）はモンゴリアの突厥諸碑文を現地寫真のスライドを使い紹介した。フランケ（H. Franke, München）は Karunadaz（迦魯納答思、元史一三四）、そしてタウベ女史（E. Taube, Leipzig）は「アルタイのトゥヴァの民における死について」の報告であった。以上、シンポジウムの各報告は、各人が論文に仕立て、今年中にプロシーディングズとして公刊されることになっている。今回ペテルブルグ組が多く出席したのが目立った。三日目、夕刻にBBAWのレセプションがあり、「カジノ」と表札のある會議場の隣室に五、六十人が集まった。この大會はトルファン研究における東西ドイツ統一を内外に印象づけ、東西は一つの、ガバイン女史の思いがここに實を結んだと感じた。

最終日に、郊外にあるガバインの墓參とインド美術館の見學が豫定された。松林の中に教會と墓地公園が静かにたたずむ。松の大木が寄り添うようにガバインの兩親とともに眠る墓碑があった。ツィーメが黄白の花束を添え、ズンダーマンが墓參の言葉を述べて、しばし黙想した。ダーレム美術館に近づくころ雨が降りだしていた。

なお私は、この機會にテーマのウイグル文觀音經斷片に關連する寫本をトルファン研究所で調査しておきたいと考え、一週間早めの、十二月一日に出かけることにしていた。出發の直前（十一月二八日）にベルリンより書簡が届いた。到着早々ベルリン自由大學のトルコ學研究所（Prof. Dr. Barbara Kellner-Heinkele）での講演依頼である。實際には六日から八日にかけて急遽設定された講演シリーズであって、國外參加者の滞在費補助のためにベルリン自由大學から財政支援を引き出すものであった。筆者から始まりペテルブルグのシチェルバク（Prof. Dr. A. M. Ščerbak）、アンカラ（ハジェッテペ大學）のオルメズ（Dr. Mehmet Ölmez）、カザン大學のマフムトヴァ女史（Doz. Dr. Alta Makhmutova）そしてタシュケント（ウズベク科學アカデミー）のサリムサコフ（Prof. Dr. Bahadir Sarimsakov）ほかの順序で各一時間あて行われた。マフムトヴァ以下は各國語（トルコ語）の講演で通譯はなかった。二十名前後の學生のほかトルファン研究所のトルコ語關係スタッフやポーランドのスタコウスキー（Dr. Marek Stachowski, ヤクート・ドルガン言語學）などが聽講した。トタリスタンのマフムトヴァ女史のタタル語講演はきれいな言葉づかいですばらしく聞こえた。第一音節のａをｏのように發音するが、書き言葉は Tataristan である。*başka* はボシュカと聞こえるのに、常套的なアラビア・ペルシア借用語はトルコ共和國トルコ語とまったく同じ發音であるのが興味深かった。しかし講演「コザン・トタル（Kazan Tatar）國の歴史について」の私の理解度はわずかであった。ケルナー教授のトルコ學研究所はダーレム地区の閑静な住宅街にあり、二階建半の通常の住宅に研究所の小さな表札があるにすぎない。玄關は少し階段をあがり、直接二階

に通じ、左に教室の入り口と右に研究室兼用の居間、その階下の一室がライブラリーがある。トルコ人らしい學生もかなりいたように見受けられ、私たちの案内役をしてくれたフンボルト大學の學生、カユ（Kerem Kayı）はテュービンゲン生まれのトルコ人であった。また同様にベルリン自由大學のイラン學主催の講演會もあったが、私は參加しなかった。

最初にウンターデンリンデン通りの研究所を訪れたのは、一九六七年のことで、今から二十八年前になる。イスタンブル大學留學の歸途、藤枝晃先生と故山田信夫教授のおかげで、當時ここにおられたハザイさんに會い、ウイグル文八陽經寫本の閲覧のために世話をしてくれたのがツィーメ氏であった。その後二度（1979, 1981）訪れる機會を得たのは、龍谷大學佛教學研究所との間に交流が開けたことも間接的に幸いしたが、彼のおかげである。研究所内の通路の壁に、舊“Orientalische Kommission”の表示と矢印が殘り、外見は當時とあまり變わっていないが、いまはなごやかな雰圍氣がみなぎる。この研究所の所屬する國立圖書館の隣は、フンボルト大學、ノイエ・ヴァッヘ（新衛兵所）、歷史博物館、そしてシュプレー川を渡ると、そこはマルクス・エンゲルス廣場であるが、ノエル・バザールが立ち並び遊園地となって賑わっていた。ブランデンブルグ門の脇にあるウンターデンリンデン・Sバーン驛は三十年ぶりに閉鎖が解け再開されている。夕刻になるとクリスマスをひかえてあちこちで教會音樂會が催されていた。一方各所の路上に建築現場の二段組ユニット（いわゆる飯場）が連なりクレーンが林立し、夜明け前から工事の音が聞こえ、舊東側は復興・建築ラッシュの感がある。東西の壁のもと一九八〇年代から交流の曙光がみえたけれども、この間ツィーメ氏らはトルファン文獻の解明一筋に努力を惜しまなかった成果が今回のシンポジウムを成功に導いたのではなかろうか、と思う。

ところで、いわゆるトルファン収集品は、第二次大戰で疎開したものも、再びベルリンに集められている。純粋に漢文關係のものとサンスクリット語諸斷片は舊西側のベルリン國立圖書館プロイセン文化財団（ポツダマー・シュトラーセ）に置かれる一方、一部漢文を含むその他の言語文獻は、もとのウンターデンリンデンにまとめられつつある。私はウイグル文觀音經寫本を、マインツ番号を含めて、トルファン研究所内で閲覧した。もっとも閲覧・コピーサービスの手續きはポツダマー・シュトラーセの管理下にあるが、ツィーメの配慮のおかげで研究所内で書類にサインするのみですませることができた。歸途、トゥグーシェヴァ女史の厚意によりペテルブルグの東洋學研究所で長年念願していた寫本を閲覧できたことも幸運であった。なお本稿の執筆にあたり西脇常記、吉田豊及び梅村坦の各氏から助言・配慮を賜り謝意を表す次第である。またトルファン収集品の現状については、西脇常記「ドイツのトルファンコレクション（ベルリン國立圖書館所蔵の漢語文書）」（月刊百科3・5、no. 398, no. 391、平凡社　一九九五）に詳しいことを申し添えたい。

最後に會議のプログラムとベルリン自由大學講演シリーズのそれを掲載し便宜とする。

Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften (BBAW) , Akademievorhaben Turfanforschung

"Annemarie von Gabain und die Turfanforschung", Berlin, 9.-12. 12. 1994, Plenarsaal der Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften, Jägerstr.22-23, 10117 Berlin.

Tagungsprogramm

Freitag, d. 9. 12. 1994

9.00	Eröffnung der Tagung. Vizepräsident der BBAW, M. Bierwisch. Vorsitzender der Kommission, K.-V. Selge. Tagungsleiter, W. Sundermann.
	Vorsitz: J. Hamilton
9.30	P. Zieme: Annemarie von Gabain und die Turfanforschung.
10.00	G. Hazai: A. v. Gabain und die türkische Sprachwissenschaft.
10.30	*Pause*
11.00	A. v. Tongerloo: From Germanistics to Oriental Studies: Willi Bang Kaup in Leuven.
11.30	Gh. Gnoli: Farn als Hermes in einer soghdischen Erzählung.
12.00-14.00	*Mittagspause*
	Vorsitz: H. Bechert
14.00	D. Maue: Zu den uigurische und iranische Brāhmī-Manuskripte.
14.30	J.-U. Hartmann: Die indisch-türkische Bilingue TT VIII G.
15.00	*Pause*
15.30	K. Wille: Die Hoernle-Fragmente in der Turfan-Sammlung.
16.00	K. T. Schmidt: Ein Vergleich der tocharischen Maitreyasamitināṭaka mit der uigurischen Maitrisimit.
16.30	M. Vorob'eva Desjatovskaja: The New Materials in the S. E. Malov Collection.
17.00	*Pause*
17.30	J. Ebert: Wesensmerkmale manichäischer Kunst.
18.00	Zs. Gulácsi: Local Material Culture in Uyghur Manichaean Miniatures.
19:00	Abendrunde in den Räumen der Turfanforschung: *Persönliche Erinnerungen an Annemarie v. Gabain.*

Samstag, d. 10. 12. 1994

	Vorsitz: D. N. MacKenzie
9.00	K. Röhrborn: Chinesische Binomina im Uigurischen.

9.30	L. V. Clark: The Early Turkic and Sarig Yugur Counting System.
10.00	*Pause*
10.30	S. Tezcan: Neue Interpretationen des alttürkischen Wahrsagebuches.
11.00	T. Tekin: On the Old Turkic Daitive-Locative Suffix {+A}.
11.30	M. Ölmez: Über die Sanskrit- und Chinesisch-Kenntnisse der Uiguren.
12.00-14.00	*Mittagspause*
	Vorsitz: L. Johanson
14.00	J. Hamilton: The Dating of the Old Turkish Tunhuang Manuscripts.
14.30	J. P. Laut: Die Hami-Handschrift der uigurischen Daśakarmapathāvadāna-mālā.
15.00	*Pause*
15.30	H. Umemura: Some Uyghur Inscriptions in the Ruined Buddhist Temple of Beshbaliq.
16.00	M. Erdal: Zum alttürkischen Vokalismus.
16.30	L. Ju. Tuguševa: Die türkischen Texte der Petersburger Sammlung.
	Vorsitz: M. Erdal
17.00	*Pause*
17.30	J. Oda: A Fragment of the Uighur *Avalokiteśvara-Sūtra* with Notes.
18.00	E. Tryjarski: Kritische Bemerkungen über neuen Versuche der Entzifferung der protobulgarischen Inschriften.
18.30	S. G. Kljaštornyj: New Researches on the Old Turkic Runic Inscriptions of Mongolia.

Sonntag, d. 11. 12. 1994

	Vorsitz: E. Tryjarski
9.30	E. Taube: Sterben und Tod bei den Tuwinern im Altai.
10:00	R. Emmerick: A Khotanese Monastic Account Book.
10.30	*Pause*
11.00	E. Meščerskaja: Syrian Fragments of the N. N. Krotkov Collection from Turfan.
11.30	H. Franke: Data from Chinese Sources on Karunadaz and his Family.
12.00-14.00	*Mittagspause*
14.00	Besuch des Museums für Verkehr und Technik (*Stadtplan Nr. 114*): *Typen für Dich und mich. Eine Ausstellung zu Geschichte und Wirkung unserer Schrift.*

18.00 Empfang durch die BBAW.

Montag, d. 12. 12. 1994

9.30 Besuch des Grabes von Annemarie v. Gabain.

10.00-12.00 Besuch der Studiosammlung im Museum für Indische Kunst (Leitung: L. Sander).

12.00-14.00 *Mittagspause*

Vorsitz: H. Franke

14.00 M. Shōgaito: On the Contents of the Uighur Version of the Abhidharmakośabhāṣyaṭīkā Tattvārthā.

14.30 W. Scharlipp: Zu den uigurisch-lamaistischen Texten.

15.00 O. Sertkaya: Die Geschichte der im zweiten Weltkrieg verlorengegangenen und zerstörten uigurischen Texte und das uigurische Bruchstück mit Sternennamen.

15.30 *Pause*

16.00 N. Sims-Williams: The Sogdian Texts in Brāhmī Script.

16 30 M. Maggi. The Prolegomena to an Edition of the Khotanese Sudanāvadāna.

17.00 J. D. BeDuhn: The Manichaen Sacred Meal.

17.30 Abschlußsitzung: W. Sundermann.

Freie Universität Berlin, Fachbereich Philosophie und Sozialwissenschaften II, Institut für Turkologie (Prof. Dr. Barbara Kellner-Heinkele), Podbielskiallee 58, Erdgeschoß, 14195 Berlin-Dahlem.

Turkologisches Symposium

Einladung:

Dienstag, d. 6. 12. 1994

16.00 Juten Oda : *The Question of tutung in Uighur—Was this honorific title given to a Buddhist monk or priesthood only?*

Mittwoch, d. 7. 12. 1994

12.00 Aleksandr M. Ščerbak : *Analogy in the Turkic Languages.*

13.00 Mehmet Ölmez : *Dil devrimi sonrasında kişi adları kaynağı olarak Eski Türkçe.*

14.00 Alta Makhmutova : *Wer sind die Tataren? Die Geschichte der Tataren aus der Sicht der heutigen Historiographie*(in tatarischer Sprache).

Donnerstag, d. 8. 12. 1994

16.30 Bahadir Sarimsakov : *Die Stellung der naqšbandijja in der uzbekischen Literatur* (in uzbekischer Sprache).

17.15 Bahadir Sarimsakov : *Glaubensvorstellungen bei den Uzbeken* (*Aberglaube u.ä*).

18.00 Asliddin Nizamov (Tadschikische Akademie der Wissenschaften, Duschanbe) und Angelika Jung (Humboldt-Universität zu Berlin) : *Begegnung mit uzbekischer und tadchikischer Musik* (mit Musikbeispielen).

Freie Universtät Berlin, Institut für Iranistik, Reichensteiner Weg 12-14, 14195 Berlin (Prof. Dr. Werner Sundermann, Prof. Dr. Maria Macuch).

Donnerstag, d. 8. 12. 1994

10:00 Gherardo Gnoli (Universität Rom) : *Erwägungen zur Etymologie des Wortes "Farn"*.

Montag, d. 12. 12. 1994

19:00 Nicholas Sims-Williams (Universität London) : *Letter Formulas and Omen Texts between Mesopotamia and China* (Akademie der Wissenschaften, Unter den Lin den 8).

東方學第九十輯

平成七年七月三十一日發行

發行所 財團法人東方學會
東京都千代田区西神田二一四一一